AR5
331
8

日露戦役の回顧と
我等国民の覚悟

国立国会図書館

0056472000

0056472-000

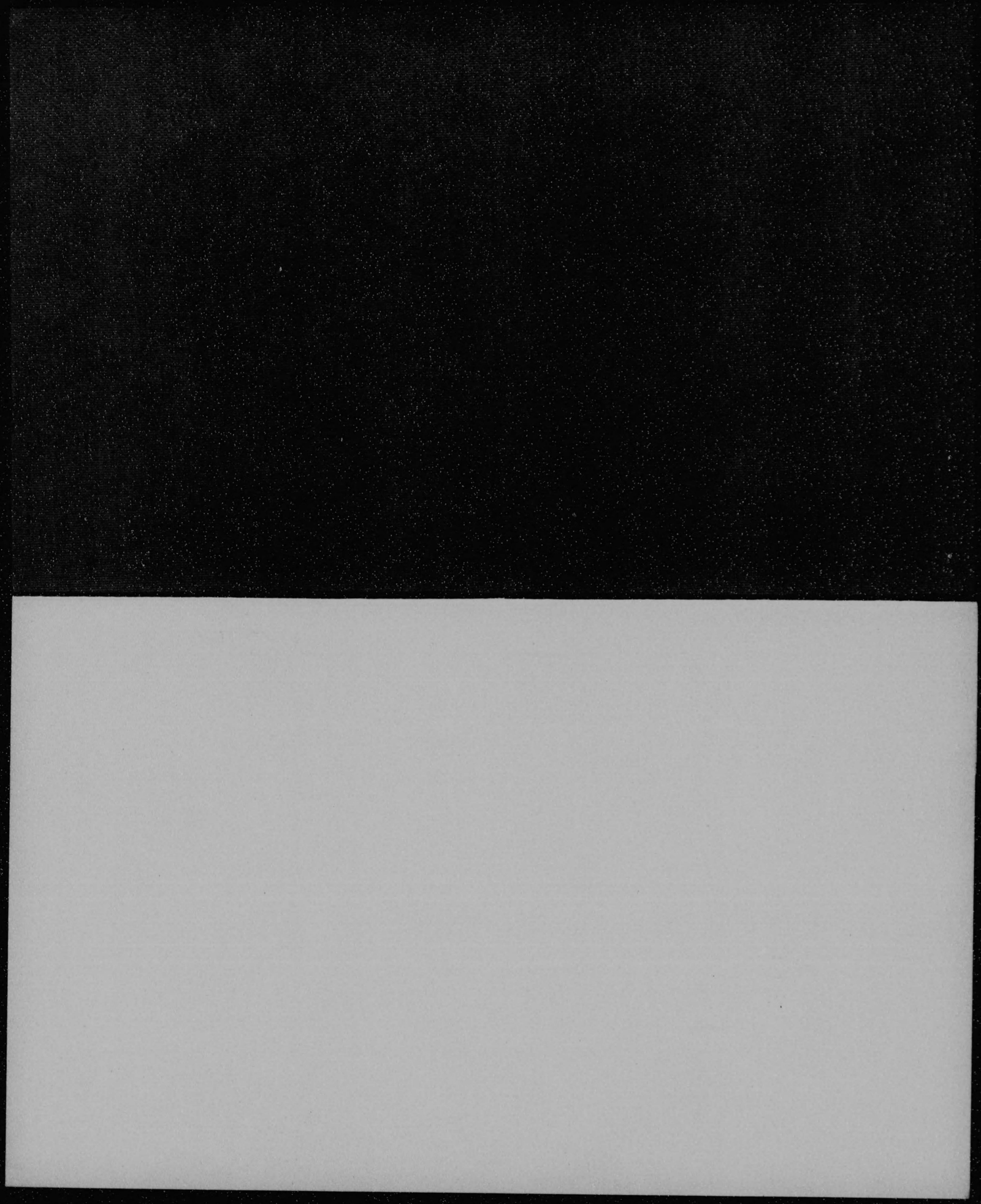
ＡＲ５－３３１－８

日露戦役の回顧と我等国民の覚悟

陸軍省新聞班

1936

AJC



AR5
331
8

日露戰役の回顧と我等國民の覺悟

AR5
331
8

日露戰役の回顧と我等國民の覺悟

目　次

はしがき
第一　日露戰役の道義的意義……一
第二　日露戰役當時及び其の後の日露(蘇)兩國を中心とする國際情勢の變遷……三
第三　軍備を中心とする日蘇情勢の比較……一五
むすび……四六

392.38
國會圖書館
50.7.14
1028431

日露戰役の回顧と我等國民の覺悟

はしがき

日露戰役當時露國の勢力下に在つた滿洲は、今や獨立國として我が國と不可分一體の關係に在つて東亞の平和確立の重責を負擔し、又日滿共同防衞の主旨に依り、我が國防の第一線は遠く滿蘇國境にまで進められ、蜿蜒數千粁に亙る國境を挾んで强大なる極東蘇軍と相接することゝなつた。

又當時の露國は蘇聯邦となり、國家組織を一變してはゐるが、其の對外特に極東政策は、依然として覇道侵略的であり、更に赤化に依る思想侵略をも加へ、其の手段は從來に比し一層陰險且つ深刻となつてゐる。殊に其の背後の力たる軍備充實の狀況に至つては、到底過去の比ではない。

隣邦支那は、此の間歐米列強の爲めに植民地化せられ、遂には夫れ等の共同管理或は領土分割の俎上に載せられんとする虞すらあるに至つたが、幸にも、我が日本の儼然たる存在に依つて、辛うじて其の厄を免れて來たのである。然るに不幸にして彼れは之れを悟らず、其の偏狹なる自尊心及び歐米依存の思想に禍せられて、次第に反日侮日の態度を取るに至り、以夷制夷・遠交近攻等彼れ一流の傳統的政策と相俟つて、事毎に我が國に楯つき、徒らに歐米列強の東亞侵略に好餌を提供しつゝある現狀である。

然らば日露戰役當時、我が國に有形無形の援助を與へた英米等は今果して如何にと云ふに、其の後に於ける我が國の勃興を嫉視し、當時の好意は今や反感と代り、其の政策の多くは反日に傾いて居ると謂ふも差支ない。就中華府會議以來の彼等の露骨なる對日政策は如實に之れを示してゐる。

斯くの如く現時に於ける我が國四圍の情勢は、日露戰役當時に比して格段の相違があり、我が正義日本の進路には幾多の難關が横たはつてゐる。殊に東亞平和の礎石とも謂ふべき滿洲國の建設は、漸く其の第一歩を踏み出したのみであつて、其の獨立を保全して健全なる發達を促す爲めには、我等は眞に異常の決意を以て、此等障碍の突破に邁進せねばならぬことを痛感する次第である。

× ×

我が國は明治開國以來、歐米列強の對外政策の基調が如何なるものであるかを具さに認識したが、此等の多くは功利的自己中心主義であり、又弱小國家竝びに民族に對する壓迫と搾取とに外ならず、從つて、彼等の覇道政策は、各國家・各民族間の對立と抗爭とを招きこそすれ、全世界の平和・全人類

の幸福を招來せんとする我等の理想とは、相容れぬものであると謂はざるを得ない。之れに反し、我が肇國の理想たる八紘一宇の大精神に則る皇道政策は、人類の對立を排除し四海同胞・共存共榮を庶幾するものであつて、眞に全世界・全人類を救ひ、其の永遠の福祉を齎さんとするものである。

從つて、斯くの如き崇高なる我が道義的世界政策に反對し、公正無私なる東亞の平和確立の使命達成を阻止せんとするものあらば、斷乎として之れを是正すべきである。之れが爲め、日本國民は協心戮力、擧國一體となり、如何なる難關、如何なる障碍に遭遇するも之れを突破するの覺悟を持つと共に、我が肇國の理想を顯現し、皇謨の恢弘に邁進するの信念を堅持しなければならぬ。

茲に第三十一回陸軍記念日を迎へるに當り、日露戰役を回顧すると共に、現下に於ける我が國四圍の情勢を紹介し、以て時局に處する我等國民の覺悟を述べたいと思ふ。

第一　日露戰役の道義的意義

日清戰役により我が國が遼東半島の讓渡を受くるや、露國は是れを以つて東洋平和に害ありとなし、佛・獨兩國を誘つて我が國に對し所謂三國干渉を行ひ、剩へ我が國が其の要求を容れて之れを還附するや、直ちに自ら滿洲の侵略を企圖し、更に義和團事件に際しては、奇貨居くべしとして故らに其の暴動を激化せしめ、之れを口實として大兵を滿洲に進めるに至つた。又事件終熄後も、依然として駐兵し、却て益〻露骨なる滿洲經略を進め、東亞平和の攪亂、國際道義の蹂躙等、不德橫暴の限りを盡くしたのである。

之れに對して、我が國は屢〻撤兵の警告を與へ、且つ有らゆる手段を盡くして平和裡に事の解決を圖つたが、遂に彼れの反省するところとならず、已

むを得ず開戰するに至つたのである。

されば、畏くも宣戰の詔勅にも

朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恆久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亙リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ

と仰せられて居る次第である。

之れを要するに日露戰役は、露國が領土侵略慾に驅られて横暴の限りを盡くし、我が國を弱小國と見縊つて、我が正當なる勸告に對し一顧だもしなかつた爲め生じたものである。換言すれば、我が國が其の國力の如何をも顧みず、蹶然立つて膺懲の師を興したのは、全く露國の暴虐を制し、東亞の平和を確保せんとする道義に立脚したものであり、實に我が皇道精神の發露にに外ならなかつたのである。

第二　日露戰役當時及び其の後の日露(蘇)兩國を中心とする國際情勢の變遷

露國の極東侵略は、第十六世紀の末葉に於ける哥薩克族の西伯利侵入に始まり、第十七世紀の中葉には、**バイカル**湖東岸の地を略し、更に一六八九年の**ネルチンスク**條約に依つて外興安嶺以北の地を、一八五八年の瑷琿條約に依つて黒龍江以北の地を、又一八六〇年の北京條約締結斡旋の報酬として烏蘇

里江以東の地を獲得する等、廣大なる地域を恰も無人の境を行くが如く席卷し、此の方面よりする侵略の企圖は、日露戰役に至るまで繼續せられた。斯くて日露戰役となり、我が正義の劍によつて彼れの野望は破碎せられ、數世紀以來の企圖は、此に一時挫折するに至つた次第である。

當時露國の侵略企圖に對しては、其の同盟國たる佛國を除き、東亞に勢力を有する列强特に英米等は、著しき反感を有して居たのであつた。

而して帝政露國の覆滅して蘇聯邦となるや、其の對外政策は更に思想侵略の新たなる手法を加へ、一層巧妙且つ大規模となつた。即ち極東に對しては、『世界革命は東方に於て決す』とのレーニンの標語に基き、赤化の魔手は著々として伸び來つた。

外蒙に對しては、一九二一年白系のウンゲルン軍掃蕩の機會に乘じ、外蒙國民黨を使嗾して赤色政府を樹立せしめたが、更に一九二四年には蒙古共和國政府を組織せしめ、今や完全に之れを赤化して事實上蘇聯邦の外廓たらしめ、又新疆に對しては、一九二八年赤色暴動を煽動して共產政府の樹立を企圖し、一度は失敗したが、其の後盛世才を支援して、遂に一九三四年新疆統一の業を完成せしめ、最近新疆・蘇聯邦間には、共同防衞・經濟援助に關する密約を締結したと傳へられ、新疆も亦第二の外蒙たらんとしつゝある。

更に支那本土に對しては、其の共產黨を支援して之れが赤化を企圖すると共に中央政府に策動し、其の以夷制夷の政策を利用して日滿支を離間し、且つ聯蘇容共政策を採用せしめんとしてゐる。

又滿洲國に對しては、盛んに國境方面に於て事を構へつゝある外、密かに匪賊を操縱して國內の攪亂を策しつゝある。

次に歐洲方面に於ては、世界大戰後其の急進的世界赤化政策の爲め列強から甚だしく白眼視せられ、當時四面楚歌の獨逸とのみ僅かに友好關係を保ち、其の他に對しては殆んど完全なる孤立狀態であつたが、**スターリン**が政權を掌握するや、一國社會主義を標榜して其の世界赤化政策に一時的擬裝を施すと共に、對外的にも平和政策を標榜して、漸次諸國との關係を緩和するに至つた。即ち隣邦と不侵略協定等を締結し、更に世界大戰後一時關係良好でなかつた佛國と再び接近し、一九三四年には其の勸誘に依つて國際聯盟に加入して常任理事國の椅子を獲得する等、歐洲外交界に活躍し得るに至つた。而して**ヒツトラー**が强硬政策を採用するに及んで獨逸との關係は逆轉し、更に其の所謂爆彈宣言に依り獨・佛兩國の關係緊張し、蘇聯邦亦其の脅威を感ずるに至るや、佛國との接近は急に其の度を加へ、佛・蘇相互援助條約の成立にまで進展するに至つた。又英・蘇間は兩國の政策上根本的に融和し得るものとも考へられぬが、少なくも現在に於ては小康を得て居ると謂へよう。

米・蘇間は蘇聯邦成立以來斷交狀態に在つたけれども、昭和八年米國の蘇聯邦承認と共に、十數年振りに兩國の國交は恢復を見るに至つた。

之れを要するに、蘇聯邦の國際環境は、日露戰役當時の孤立狀態に比すれば遙かに改善せられ、其の國際的地位は大いに向上し、積極的對外政策を採らんが爲めには、日露戰役當時に比し著しく有利なる狀態に置かれて居ると謂ふことが出來る。世上動もすれば、歐洲政局の不安を過大視するの餘り、蘇聯邦は之れに牽制せられ、極東方面に對し積極的に進出する力なしと唱へるものがあるが、思はざるの甚だしきものである。

× × ×

露國の東漸と殆んど時を同じうして、他の歐洲列強も次第に極東に進出を企圖するに至り、第十九世紀の初期には先づ英國の勢力が支那に進入し、日清戰役以後は獨・佛等も之れに相次ぎ、日露戰役頃には大體現在の如き列強勢力の分野が形成せられるに至つた。

英國は斯くの如くして次第に支那に牢乎たる經濟的基礎を作つてゐたので、露國の極東に對する侵略を以て、早晩支那に於ける自國の既得權益と衝突するのみなず、軈ては印度への侵略にまで進展するものと爲し、我が國と共同して露國の南下を阻止せんとし、明治三十五年一月遂に日英同盟の締結を見るに至つたのである。

然るに戰役の結果、我が國運隆々として發展するを見るや、英國は漸次東亞に於ける其の覇權の動搖せんことを虞れ、我が國の發展を抑壓せんとするの擧に出たのであるが、殊に世界大戰後は米國と接近し、華府會議に於ては之れと協同して日英同盟を廢棄し、四國協約・九箇國條約・軍備制限條約等を締結し、以て我が海軍力を制限すると共に、我が飛躍發展を阻止することに努めた。又滿洲事變に際しては、現狀維持機關たる國際聯盟を操縱して、世界を擧げて我が國の主張に反對せしめた事は、吾人の記憶に新たなる所である。更に輓近我が海外貿易の隆々たる發展を見るや、全英帝國を動員し、且つ他國をも誘つて我が商品の進出を阻止しつゝある。加之最近に至つては、支那に於ける其の經濟的覇權の失墜せんとするの兆あるを見て、彼れは支那の所謂歐米派要人と提携して、南京政府の幣制改革を支援し、以て支那に於ける自己の金融支配權の確立を策したと謂はれてゐる。而して斯かる政策の外、一方に於ては新嘉坡軍港の大々的構築、香港要塞の增築等、著々東亞に

對する軍備の完成を期してゐるのである。

× × ×

米國は列強に比し極東の利權獲得には立ち後れてゐたが、日淸戰役の後支那に於ける門戸開放・機會均等主義を提唱し、新たに支那に對する地歩の獲得に努めて來た。從つて滿洲に對する露國の飽くなき野望に對しては好感を持たず、日露交涉漸次險惡を加へ、兩國の關係次第に切迫するに連れ、遂に我が國に好意を寄せるに至つた。然るに戰役終了するや、遽かに極東に對する利權獲得の企圖を露骨に示し來り、其の結果として自ら我が國と對立するの情勢となつた。即ち一九〇六年**ルーズベルト**大統領の我が國に對する南滿撤兵の要請及び**ハリマン**の滿鐵日米共有案の提議、一九〇七年米國財團の提議に係る錦瑷鐵道敷設問題及び米國總領事**スドレート**の提唱した滿洲開發竝び

に鐵道敷設を目的とする滿洲銀行設立案、一九〇九年國務卿**ノックス**の滿洲鐵道共同管理の提議、一九一〇年四國借款に依る滿洲利權割込運動等は、日露戰役以後世界大戰に至る間の其の極東政策の一端を物語るものであるが、大戰後に於ては英國と提携して、我が國壓迫の態度に出でたことは既述の通りである。殊に最近に於ては、滿洲事變當時の**スチムソン**の恫喝的態度、我が國を對象とする陸海軍備の擴大就中海軍及び航空勢力の增强、太平洋岸及び島嶼に於ける攻勢據點の設定、今次の軍縮會議に於ける優勢海軍力保持の策謀等、事毎に我が國に對し對抗的乃至威嚇的態度を持しつゝあるは、世界平和の爲め誠に遺憾に堪へぬ所である。但し米國の一部に於て、我が國の東亞安定勢力たるの事實を認め、須らく米國は本來の**モンロー**主義に還り、東亞に對する積極的政策を緩和すべしと爲す者あるに至りたることは注目すべき

ことである。

× ×

支那は日露戰役當時我が國と比較的良好なる關係に在り、此の情勢は戰後暫くの間續いて居たが、國民黨政府成立するや、聯蘇容共政策と共に排外政策を採り、遂に熾烈なる排日・排英運動を惹起せしめた。其の後表面的に容共政策を放棄し、所謂歐米依存政策を採るに及んで、唇齒輔車の關係に在るべき我が國を全く疎外するに至つた。殊に我が國が其の生命線として、國防上極めて重要視せる滿洲に於ける正當なる權益も、極端なる排日侮日により蹂躙せらるゝに至り、遂に滿洲事變の勃發となつた。然るに支那は依然として自己の非を悟らず、直接交渉に依つて本事件を解決せんとする我が國の勸告を斥け、以夷制夷の傳統的政策に基いて國際聯盟に提訴し、我が國に對する

× ×

列國の壓迫を誘致した。又最近に於ては、或は米國との間の棉麥借款の如き、或は英國と結託して行ひたる幣制改革の如き、或は更に再び蘇聯邦と通謀して我が國を牽制せんとしつゝあるが如き、此等は總べて何等支那自體を救ふ所以でないのみならず、却つて此等列強に支那搾取の機緣を與へるものであつて、東亞將來の爲め大なる禍根を貽すものと謂はざるを得ない。

× ×

以上を綜合するに、蘇聯邦は今や強大なる近代的軍備を中心とする綜合國力の異常なる發展を遂げ、過去に比し有利なる國際環境の中に在つて、其の極東政策は愈〻積極且つ露骨となり、滿・蘇及び滿・外蒙國境には頻々として不祥事件勃發し、外蒙或は新疆より、更に又直接內部よりする支那赤化工作は、逐日旺盛ならんとしつゝある現況である。

之れに對し我が國は、輓近國力の驚くべき進展を遂げつゝあるが、他方我が國際環境は、日露戰役當時とは全く其の情勢を異にし、我が躍進を喜ばざる列強の重圍下にあるばかりでなく、更に蘇聯邦の極東進出に直面して居るのであつて、我が國民の奮起を要すること今日の如く甚だしきはない。

而して此等日・蘇關係の整調は、外交工作に俟つべきであるが、蘇聯邦側が兩國間の懸案を善意を以て解決するの誠意なく、徒らに武力を強化し、我れを威嚇せんとするが如き態度を持續するに於ては、到底眞の平和は庶幾し得べくもないのである。

第三　軍備を中心とする日蘇情勢の比較

以上日露戰役當時よりの日露(蘇)兩國の國際環境の變遷を略述したのであるが、更に露(蘇)國極東政策の骨幹を爲す軍備に關し、日露戰役當時と現時とを比較檢討して見よう。

日露戰役當時

滿洲問題に關し、露國は最初より誠意を以て我が交渉を迎へず、故意に曠日彌久の策に出で、他面著々侵略行爲を進めたのは、全く我が國の武力を輕視し、且つ彼れの强大なる軍備を以て我が國を恫喝すれば、立ちどころに慴伏するであらうと多寡を括つてゐたからである。

日露開戰に先だつて、露國政府筋に於ては、我が國の陸軍兵力に就いて

一、動員兵力

クロパトキン大將の計算　三〇四、〇〇〇人

スーヴオロフ大佐の計算　五〇〇、〇〇〇人

佛國筋の計算

ルーシヌ中佐の計算　五八四、〇〇〇人

二、戰場に出動せしめ得べき兵力　六四七、〇〇〇人

ヴアンノヴスキー大佐の計算一一〇、〇〇〇人—一二〇、〇〇〇人

クロパトキン大將の計算　一五〇、〇〇〇人—二一〇、〇〇〇人

スーヴオロフ大佐の計算　二二八、〇〇〇人

佛國筋の計算　二六八、〇〇〇人

英國筋の計算　二一四、〇〇〇人

獨逸ゼツペレン伯の計算　三八七、〇〇〇人

等の諸情報を綜合し、日露開戰の場合、我が國の出動せしめ得べき兵力を、最大限度

歩兵	一五六大隊
騎兵	五六中隊
砲兵	六八四門
工兵	一三大隊

と判斷し、動員兵力を三十二萬、戰場に出動せしめ得べき兵力を最大限二十五萬と推定したと謂はれてゐる。又戰前**クロパトキン**大將始め多數の人を我が國に派遣して、我が軍情の偵察を爲さしめたのであるが、其の多くの者は、我が軍隊を目して弱小國の夫れと同一視し、露兵一人を以て、能く我が兵二人に對抗し得べしとなし、又我が軍の兵器及び其の操法を見て、之れを小兒の玩具遊びに譬へ、戰前行はれた東北地方の特別大演習を評して、型に合はざる一種の喜劇であるとまで罵倒した。

又我が海軍に關しても、同樣に輕視し、開戰の前年神戸沖の大觀艦式を陪觀した露國の一艦長は『日本海軍の物質的要素は完備して居るが、艦艇の操縱には將兵が果して合格し得るや否や疑はしい。』と嘲笑する等、我が物的兵備の一面のみを見て、我が國民就中軍隊の精神力に關する觀察を誤り、鎧袖一觸、直ちに我が軍を擊滅し得るものと確信してゐたのである。

當時彼我の國力、特に兵備の著しき相違により、我が對露戰果の見透しも、亦樂觀を許さざるものありとされてゐた。時の參謀次長兒玉大將が金子遣米使節に對し、

『先づ戰は五分五分と思ふ。四分六分に行つたらよくやつたものと思つて呉れ。』

と述べ、又山本海相が

『日本の軍艦は半分は沈沒する覺悟で、何とかして勝たねばならぬと思つてゐる。』

と云つて居ることに依つても之れを想像し得よう。

右の樣な情況にも拘らず、いざ開戰となるや、全世界の豫想を裏切り、我が軍は破竹の勢を以て敵を擊破した。併し乍ら此の戰捷の裏面には、回顧するだに慄然とする幾多の危險が包藏されてゐた。即ち開戰後未だ數個月も經過しない遼陽會戰に於て既に砲彈の缺乏を來たし、砲兵工廠の製造能力では不十分なる爲め、廣く全國の鍛冶屋までも動員して彈丸の製造に從事せしめ、鋼鐵を以て作るべき彈丸を銑鐵を以て間に合せ、或は其の砲彈の中には、急造・粗製の爲めに敵前に落下するも破裂しないものすらあつたのである。殊に奉天會戰の際の如きは、我が軍は露軍を包圍し、將に之

れを殲滅して戰爭を終局に導き得べき形勢にあつたが、何分にも兵力の不足、彈藥の缺乏等の爲め、遂に其の目的を達成し得ず、遺憾ながら次期作戰を準備せねばならぬこと、なつたのである。

日露戰役間に於ける日露兩軍の消費彈藥數は左の如くである。

小銃彈

	日本軍	露軍
遼陽會戰	九百萬發	三千萬發
沙河會戰	九百萬發	二千四百萬發
奉天會戰	二千萬發	八千萬發

砲彈

遼陽會戰	十二萬發	十四萬發
沙河會戰	十萬發	六萬發
奉天會戰	三十五萬發	五十四萬發

即ち我が軍の消費彈藥數は、沙河戰の外は露軍に比し遙かに僅少であつたのである。

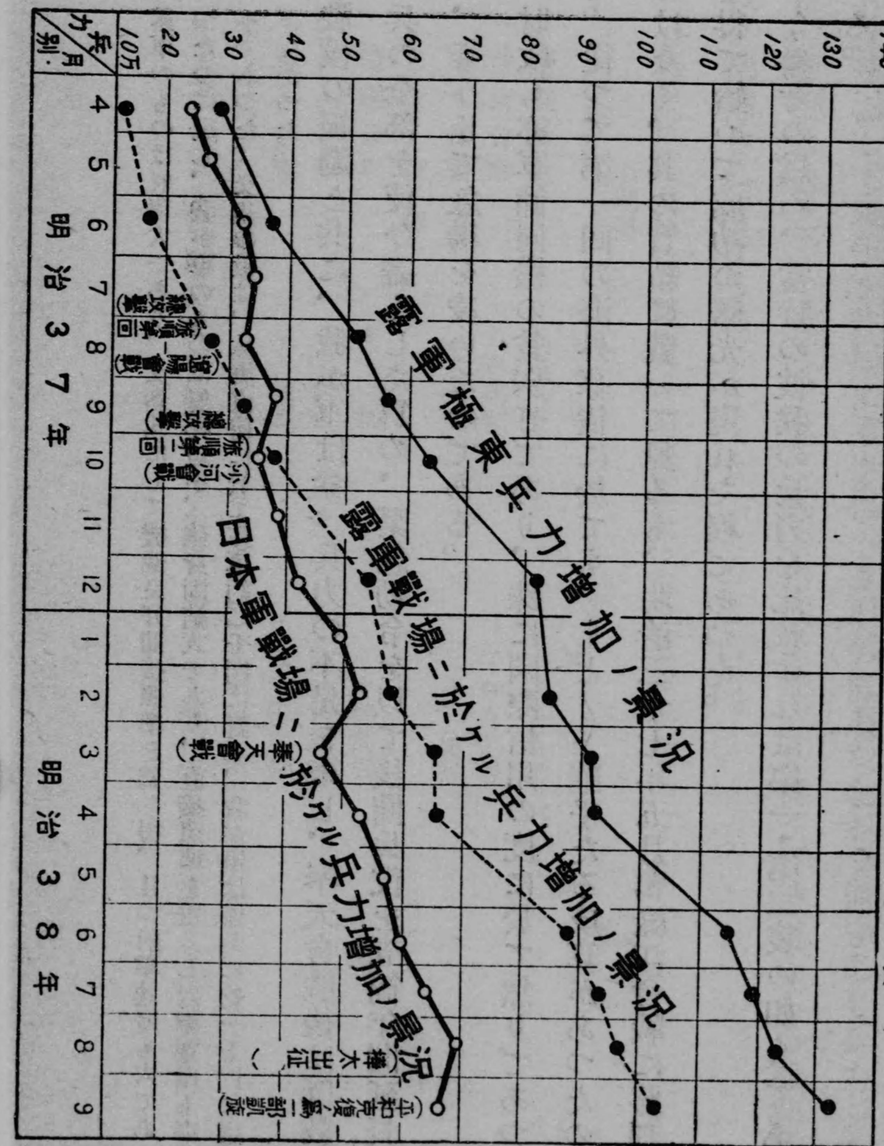
又兵器に於ても我が軍のものは舊式且つ少數であり、火砲の例を採つて見ても、第三表の如く露軍のものは射程大であり、又新式にして機能良好間接照準を爲し得、且つ射擊速度も大であつたのに反し、我が軍のものは射程短小、砲身固結式であり、直接照準を主とし射擊速度も亦小であつた。又其の數は、休戰直前に於て露軍約二千門に對し、我が軍は僅かに約一千門に過ぎなかつた。

又戰役の經過と共に、我が軍は益〻兵力の不足を來し、奉天會戰後は既教育兵の全部を使ひ盡くした爲め、緊急勅令を以て後備兵役を五箇年間延長し、辛うじて急場を凌いだのである。

財政も亦軍備同樣の貧弱さであり、殊に國際信用の度に於て然りであつた。從つて第一回の海外募債に於ても、もと〳〵確乎たる成算があつたのではなく、其の實績に就いて見るも、明治三十七年五月鴨綠江會戰に勝利を得て始めて成功の曙光が現れた程であつた。

今參考の爲め、當時の彼我の兵力を比較すれば第一・第二表の如くである。

日露兩軍兵力增減比較表（本表ニハ後方部隊ヲ含ム）



（第二表）

日露兩軍兵力の比較

區分	軍	開戰直前總兵力 部隊數	戰場兵力 奉天會戰時 部隊數	戰場兵力 奉天會戰時 戰鬪員數	戰場兵力 戰端開始（講和談當判時）部隊數	戰場兵力 戰端開始（講和談當判時）第一線兵力（師團輜重を含む）
露	日本軍	歩兵六〇師團 騎兵二七師團（歩兵二四三大隊 騎兵七九中隊 砲兵五四中隊）	歩兵 騎兵 砲兵	三七九大隊半 一五一中隊 一一一九門	歩兵 騎兵 砲兵	二四〇大隊 五七中隊半 九九二門
	露軍	十三師團（歩兵一五六大隊 騎兵二旅團 砲兵二旅團（騎兵五九中隊 砲兵一〇八中隊）	歩兵 騎兵 砲兵	二十四萬九千八百人	歩兵 騎兵 砲兵	二四六大隊 六五中隊半 砲兵一九七中隊（一一八〇門）
露	日本軍	歩兵二九師團 騎兵一旅團（歩兵一七旅團 騎兵一四中隊 砲兵一二旅團）	歩兵 騎兵 砲兵	三十六萬七千二百人	歩兵 騎兵 砲兵	六八七大隊 二二二中隊 砲兵九〇中隊（二二六〇門）
	露軍	十三師團（歩兵一五六大隊 騎兵二旅團 砲兵二旅團（騎兵五九中隊 砲兵一〇八中隊）	歩兵 騎兵 砲兵	二十四萬九千八百人	歩兵 騎兵 砲兵	二四六大隊 六五中隊半 砲兵一九七中隊（一一八〇門）
				六十五萬三千人		四十三萬二千人

軍備を中心とする日露情勢の比較

（第三表）

日露兩軍裝備の比較の一例

種類	露軍	日本軍	摘要
小銃 最大射程	二、〇〇〇米	二、〇〇〇米	戰役間歩兵銃の主體たる露國側三ソーニヤ五連發銃、日本側三十年式歩兵銃につき比較す。口徑は露軍七・六二粍、日本軍六・五粍とす。
野砲 初速	五八八米	四八七米	一、本表は野砲に在りては、露軍三吋速射野砲、日本軍三十一年式速射野砲、山砲に在りては露軍三吋速射山砲、日本軍三十一年式速射山砲につき比較す。
野砲 最大射程	著發 六、四〇〇米 曳火 五、五〇〇米	著發 六、二〇〇米 曳火 四、七七五米	二、露軍の野・山砲は新式にして機能良好、間接照準を主とし射程及び發射速度大であつたのに反し、日本軍のものは砲身固結式であり射程、發射速度も亦露軍に劣つてゐた。
山砲 初速	二七一米	二六三米	
山砲 最大射程	著發 四、一六〇米 曳火 四、一六〇米	著發 四、三〇〇米 曳火 三、六〇〇米	上陸掩護用として最初第二軍のみに交付したのであるが、其の效果の大である爲め作戰の進むに隨ひ各軍にも交付した。
機關銃（砲）	開戰當初より有す。		
氣球	同右	我軍は有せず。	
照明彈	同右	戰役中期より有す。	
手榴彈	同右	第三軍のみ最初より有す。	

現時

帝政露國が崩壞して蘇聯邦となるや、舊露軍に代つて赤軍が建設せられ、國土防衞の外、更に全世界に對する赤化鬪爭の支援を標榜し、帝政時代にも優る厖大なる軍備を保有するに至つた。

而して**スターリン**の獨裁時代に入るや、軍備を中心とする諸施設の完備に重點を置き、第一次・第二次五箇年計畫等に依つて軍需工業能力の向上を主目的とする劃期的なる生產組織の完備を策すると共に、厖大なる軍備の改善充實を著々實行しつゝある。

今最近に於ける其の軍備充實の狀況を示すと第四表の如くである。

（第四表）

赤軍々備擴張狀況概見表

部隊別＼年度	一九二七年（第一次五箇年計畫直前）	一九三二年末（第一次五箇年計畫末期）	一九三五年末
歩兵師團	約 七〇	約 七五—七六	約 八五
騎兵師團	約 一〇	約 一三	約 二〇
飛行機	約 一、二〇〇機	約 二、二〇〇	約 四、〇〇〇
戰車	約 一八〇臺	約 一、五〇〇	約 四、〇〇〇

右の結果、現在に於ける蘇聯邦赤軍の總兵力は約百六十萬となり、世界最大の陸軍兵力を擁するのみならず、其の裝備に於ても驚くべき進歩を遂げ、特に空軍、機械化部隊、化學戰裝備等に至つては、列強の壘を摩するに至りつゝある。

國民教育は極めて顯著なる進歩を遂げ、各種學校數に就いて見るも世界大戰前に數倍し、特に國民の國家的訓練には、絶大なる努力を拂つて居るのみならず、赤軍の約五〇%は生粹の共產黨員を以て編成し、更に最近に於ては、軍人の階級制度を復活して統帥系統を確立した。之れを日露戰役當時の露軍が、無學なる農民出身の兵卒と、貴族・特權階級出身の將校とより成り、將兵の融和を缺き、指揮官相互も亦反目軋轢を常として居たのに比すれば、大いに面目を新たにしてゐる。

× × ×

而して極東に於ては、滿洲事變以來厖大なる兵力を滿蘇國境に近く配置し、且つ軍事諸施設を充實擴張しつゝある。現に事變前歩兵四箇師團、騎兵

二箇旅團、合計數萬の軍隊に過ぎなかつたものが、現在では一躍歩兵十數箇師團、騎兵二乃至三箇師團を基幹とする總兵力二十數萬に達し、之れに飛行機約九百機、戰車八百臺以上、裝甲自動車五百臺以上を整備してゐる。而して此等の兵力を**チタ**及び**ダウリヤ**を中心とする後貝加爾地帶、**ラゴエシチエンスク**及**ハバロフスク**を中心とする中部黑龍江地帶、竝びに**ニコリスク**及び浦鹽を中心とする南部沿海州地帶に配備して居る外、既に外蒙には自國の軍人を入れ、最近は更に之れを增加せんとしてゐる。又浦鹽附近には、多量の爆彈を搭載して、數時間にして我が國中樞部を襲ひ、更に其の根據地迄歸還し得る超重爆擊機約百機が常置せられてゐる。

更に滿蘇國境の要線には、昭和七年以來經費十六億圓を投じたと傳へられる所謂**トチカ**と稱する堅固なる小型堡壘を、數十米乃至數百米の間隔に

三重・四重に配置して、其の數は無慮數千と推定せられ、最新式の陣地帶を構成してゐるが、此等は軍事上より觀れば、單に防勢的にのみ使用せられるものではなく、戰略戰術的には攻勢據點として、多大の價値を有するものである。

又海正面に對しては、浦鹽要塞を著々增備し、港內には數十隻の潛水艦の外多數の艦艇を碇泊せしめ、以て有事の際大陸に在る我が軍の後方を遮斷し、軍隊軍需品の輸送を中絕せしめんと企圖しつゝある。

之れに對し、我が在滿兵力は其の數分の一に過ぎず、更に飛行機、戰車等に至つては比較にならぬ現況であるに拘らず、蘇聯邦は尙ほ我が兵備に脅威を感ずると稱し、後述する如く本年度より軍事豫算を倍加し、全軍の充實に努むると共に極東赤軍の增强を企圖してゐる。

蘇聯邦が我が陸軍の全兵力に匹敵する大軍を滿・蘇國境に配備し、更に西部**シベリア**及び歐蘇方面には我が全軍に數倍する大軍と、三千以上の空軍とを控置し乍ら、尙ほ且つ之れを增强せんとしつゝあるを思へば、彼れの口實の全く理由なきを知り得ると共に、其の意圖の那邊に在るかを想像されるのである。

昨年十一月十三日、**モスコー**市に於ける第一回**スタハノフ**大會に於て、國防大臣**ウオロシロフ**が『赤軍は今や其の組織と堅實さと、有らゆる兵器の多數とによつて、前古未曾有の强大を示し、國民の信賴を赤軍一身に集め、他の諸國軍をして一指だも觸るゝ能はざらしめるに至つた。併し吾人は蘇聯邦を包圍する多數の敵に對し、目を覆うて之れを看過することは出來ない。彼等は永久に吾人と鬪爭を繼續すべく、只管蘇聯邦に對する攻擊を準備しつゝある。由來**ボリシエビキー**は常に最終の勝利を確信して居るが、今や其の實力は往年に比し十倍以上に達し、吾人が彼等と戰ひて勝利を得るや否やの問題は既に解消して、吾人は必ず勝利を獲得し得る確信を有するに至つた。併し此の勝利は人命の最少なる犧牲と、資材の最少なる消失とに依つて、齎されなければならぬ。之れが爲め赤軍の裝備竝びに之れに對する補給は、須らく世界第一であらねばならぬ』と述べ、又本年一月十日第二回中央執行委員會の席上、首相**モロトフ**が『日獨軍事同盟の締結(註、事實無根の捏造である)竝びに獨逸と波蘭との接近に關する事實は、吾人が既に其のあり得べきを豫期せるところであつて、日本及び獨逸が曩に國際聯盟を脫退したのは、其の束縛を免れ自己の積極政策を遂行する爲めであることは明らかである。此等極東の情勢及び西方國境の關係は、蘇聯邦を

して必要なる國防力を整備することを餘儀なくせしむるものであつて、本年度に於ても、著しく國防費を增大するの必要に遭遇して居るのも亦已むを得ない所である。』と述べ、一月十五日全蘇中央執行委員會會議に於て陸軍次官**トハチエフスキー**が『今や我が國は日・獨兩國に對し、一萬粁を隔てる東西兩境正面に於て、全く同時に、且つ各〻獨立して戰ふの準備を整へねばならぬ。昨年迄は民兵師團の數七四%に對し、正規師團は僅かに二六%に過ぎなかつたが、本年からは右と反對に民兵師團二三%に對し、正規師團七七%までに改編し、正規部隊の平時定員を殆んど戰時定員と同一に近きまでに增加した。』と述べ、又一月十四日同會議に於て大藏大臣**グリニコ**が『昨年度國防豫算は六十五億留(實施は八十二億留)であつたが、本年度は百四十八億留(**ゲ・ペ・ウ**豫算を合すれば百七十億留)に增大した。右は祖國の國防强化の爲め大なる保險金である。』と述べてゐるに徵しても、這般の消息を窺ひ知ることが出來る。

註　參考の爲め、近年に於ける軍事費增加の狀況を示せば、

一九三一年・三二年度各、約十四億留、三三年度約十六億留、三四年度約十八億留、三五年度約六十五億留、三六年度約百四十八億留であつて、本年度豫算を一昨年度豫算に比較すれば、約十倍に垂んとしてゐる。

以上の如く蘇聯邦の軍備は、近時飛躍的の進步・充實を遂げ、世界最大の陸軍と誇つてゐた帝政時代よりも、量・質共に遙かに優勢を示して居る。

× × ×

尙ほ戰爭遂行上、之れと密接なる關係に在る軍需工業、資源、運輸・交通等に關し、若干の說明を附加したいと思ふ。

蘇聯邦に於ける軍需工業が、第一次・第二次產業五箇年計畫の主體をなすも

のであることは、一九二八年五月**ウオロシロフ**が、共産黨大會の席上で、『五箇年計畫は、豫想敵國の聯合勢力に對し、勝利の獲得に必要なる我が國防組織の點より出發せねばならぬ。』と叫び、又一九三三年一月**スターリン**が、共産黨合同總會の席上に於て『五箇年計畫の課題は、外部よりの軍事干渉や攻撃の有らゆる企圖を斷然排撃する可能性を與ふる國防能力を最大限度に高める爲め、一切の技術的・經濟的前提條件を作り出すに在つた。』と喝破して居るのを見ても明らかである。

本計畫に依つて、先づ**ドンバス**地方の工業地帶が完成せられ、次いで更に之れよりも一層大規模なる**ウラル・クヅネツツ**の重工業地帶が建設せられ、漸次其の施設を東進せしめて、**ブレーヤ**河畔の所謂**ブレーヤ**建設(鐵工業を中心とする工業地帶で鐵鑛五億噸、石炭千四百億噸を埋藏)**アンガラ**河畔の所謂**アンガラ**建設(**アンガラ**河水力電氣＝發電能力全蘇聯邦の四六%で、其の內**バイカル**發電所五十二萬キロワツト時＝發電所百七十七萬キロワツト時、**バドン**發電所鐵鑛七億五千萬噸、石炭二千五百億噸を埋藏する大工業地帶)を始め、更に**ペトロフスキー**建設、**ソウガワニ**建設等の大事業等が興されんとしてゐる。

又右の外純軍事工業施設としては、最近**コムソモリスク**に於ける兵器廠、自動車・飛行機製造所が完成したのを始め、浦鹽に於ける極東工廠、**ニコリスク**に於ける兵器製造所、**ハバロフスク**に於ける各種軍需品工場等も、著々其の施設を改善增備して居り、又**イルクーツク**にも自動車及び飛行機製作所等の竣工を見たと傳へられてゐる。

以上の結果に依り軍需工業能力は著しく增進したのである。

今軍需に關係ある各種生產能力の一例を擧ぐれば第五表の如くである。

（第五表）

蘇聯邦生産能力の一例

種類		生産額	摘要
鐵	銑鐵	一四、五〇〇千噸	昭和十一年度生産計畫
	鋼鐵	一六、〇〇〇千噸	同右
石炭		一三五、〇〇〇千噸	同右
石油		三〇、〇〇〇千噸	同右
穀類		八八、〇〇〇千噸	昭和十年調
肉類製品		六五〇千噸	昭和十一年度生産計畫
魚類製品		一、六一四千噸	同右
砂糖		二、五〇〇千噸	同右
棉織物		三、二一五•〇百萬米	同右
亞麻織物		三二六•〇百萬米	同右
飛行機		四、〇〇〇機	同右
戰車		四、〇〇〇臺	同右
機關車		一、九〇〇輛	同右
貨車		九〇、〇〇〇輛	同右
自動車		一六一、五〇〇臺	同右
トラクター		一五四、三〇〇臺	同右
備考		本表は、蘇聯邦の公表した本年度生産計畫であつて、其の實績が必ずしも之れに伴ふものとは考へぬが、參考までに掲げることゝした。	

又資源の保有は極めて廣汎多種に亙り、重要資源に於て特に豐富であると謂はれてゐるから、生産能力の飛躍と共に、其の産出額は劃期的增加を齎す

べく、又一部の不足資源に對しては、近時工業技術の發展に伴ひ、代用品の研究にも努力をしてゐると傳へられてゐる。

蘇聯邦最近の軍需工業に就いて注意すべきは、其の著しき飛躍と共に、之れが施設を次第に極東に東漸せしめつゝあることである。即ち從來極東に於て作戰を遂行する爲めには、軍需資材を悉く遠く歐蘇方面より追送しなければならなかつたのであるが、今日は新たに極東に生產施設を設定し得たので、極東蘇軍從來の缺陷たる補給難を根本的に整調して、之れに完全なる獨立性、即ち自給自足の能力を附與するに至り、彼れの極東に對する積極的企圖遂行は著しく容易となつたのである。

次に運輸・交通施設の一例として西伯利鐵道の狀況を述べれば、此の鐵道の敷設當初は一日僅かに三箇列車を、日露戰役當時には十數箇列車を運轉してゐたに過ぎなかつた。之れが爲め日露戰役後其の複線化を計り、大戰中も尙ほ其の建設を中止することなく、一九一六年頃には**チタ**附近まで完成したのである。而して本鐵道は大戰末期以降の國內戰に於て、約七五%荒廢に歸したので、蘇聯邦政府は直に之れが復舊に努め、特に最近は第一・第二次五箇年計畫の重要事項の一として、交通就中鐵道の改善擴充に努力して來たのであるが、其の實績の之れに伴はざるものがあり、爲めに昨年春**スターリン**の片腕として、絕大なる實行力を現はして來た**カガノウキツチ**を、交通大臣に拔擢して、鐵道施設の改善と運輸業績の向上刷新とに全力を盡くさしめた結果、未だ一年を出でずして既に其の面目を一新し、西伯利鐵道も亦著しく改善せられた。其の複線工事も既に**ブラゴエシチエンスク**の北方、**ポチカレオ**まては完成して居り、其の以東も目下盛んに工事中であつて、第二次五箇年計

畫完了期までには、浦鹽まで全通することになつてゐる。而して其の素質も亦仲々優良で我が國の山陽本線に匹敵すると謂はれ、日露戰役當時に比し數倍の輸送能力を有するとされてゐる。人口稀薄荒漠たる西伯利に、斯くも能力ある複線鐵道の施設に鋭意努力しつゝある目的の奈邊にあるかは想像に難くはないが、而も蘇聯邦は此の複線鐵道のみでは滿足することなく、之れに並行する所謂バム鐵道及び西部西伯利鐵道の建設に著手して、極東に對する輸送能力を彌が上にも向上せしめんとして居るのである。

之れを要するに、蘇聯邦は近代國防に必要なる諸要素益々充實し、綜合國力の偉大なる發展を圖りつゝあると共に、極東に於ては滿蘇國境線に沿ひ厖大なる兵力を集中し、其の補給諸施設を完備し、以て極東軍獨力を以てする戰爭遂行に支障なからしめんとしつゝあるものと觀察せられるのである。

斯くの如く、蘇聯邦は軍備の優越感よりして漸次日・滿軍を侮蔑するに至り、其の結果國境線に於ける不法行爲となり、逐次其の件數を增加してゐる。又其の內容も次第に惡化し、且つ事件處理に對する態度亦次第に强硬・傲慢を加へつゝある。

試みに、昭和十年度に於ける此の種事件の狀況を示せば、第六表の如くである。

（第六表）

昭和十年度（自一月一日至十月三十一日）滿蘇蒙國境事件數

種別	東部國境	北部國境	西部國境	滿蒙國境	計
不法越境竝拉致暴行	三一	二		六	三九
國境線侵蝕				一	一
河川上不法行爲	一三				一三
航空侵犯	五	六	一		一二

合計	四九	八	二	七	六五

備考　此の外黑瞎子島（ウスリー江、黑龍江とカザケウキツチ水道とに挾まれた島）は、元來滿洲國領土であるが、蘇聯邦は之れを占領してゐる。

以上の外日・滿・蘇間に於ける國境劃定、漁業權、樺太石油問題等の未解決懸案に對しても彼は不遜の態度を以つて臨み誠意を示さない。

× × × ×

之れに對する我が國の現況は果して如何。

日露戰役後、露國は西伯利鐵道を增備し、且つ頻りに軍備を擴張し、再び東亞に多大の脅威を與へる情勢となつたので、我が國は之れに備へる爲め、明治四十年平時兵力を二十五箇師團とするの計畫を立案したのである。然るに財政其の他の事情により容易に之れが實現を見ず、大正四年僅かに二箇師團を增設したのみで、世界大戰を迎へることゝなつたのである。

而して、世界大戰により參戰列强の軍備は飛躍的進步を遂げ、何れも近代的裝備を有するに至つたが、我が軍は直接主戰場に參加しなかつた爲め、其の裝備を改善するの機會なく、遂に列强の夫れと格段の相違を生ずるに至つた。

斯かる狀態にては、到底國防の要求を充足し得ないので、軍容の刷新の爲め、大正九年以降十五箇年に亙る繼續豫算として約五億六千萬圓を計上し、之れが協贊を得たが、國家財政の不如意を理由として數次の節減と繰延べとに遭ひ、其の上大正十一年には、人馬約五箇師團に相當する大整理を行ひ、更に大正十四年には四箇師團を廢止し、其の代償として極めて少數の飛行隊。戰車隊等を整備し得たに過ぎなかつたのである。

斯くて滿洲事變を迎へたのであるが、前述の十五箇年計畫の中、既に十年を經過した昭和七年初頭に於て、僅かに全經費の三割弱即ち一億數千萬圓を

使用したに止り、軍容は殆んど刷新されてゐなかつた。此に於て、昭和七年より三箇年計畫を立て、前述の繰延べられて居た豫算三億數千萬圓を以て、取敢へず時局に應ずる兵備の充實を計ることゝなつたが、固より是れは眞に應急の施設に過ぎず、我が陸軍本來の使命達成の爲めには今後更に軍容の根本的刷新を必要とするのである。之れに加ふるに本事變の結果、我が國防の第一線は遠く北滿に及び、佛獨兩國を合したよりも更に廣大なる領域と、約三千粁に亙る滿蘇・滿外蒙國境との防衞を負擔することゝなつたのみならず、一方現時の國際情勢に處し、且つ又庞大なる蘇聯邦の軍備に備ふる要あるに至りたるを以て、兵備の充實增强の必要は愈〻以て急となつたのである。

從つて、此の際我が國は一大決心を以て軍備の充實、就中在滿兵力・航空兵力・機械化部隊の擴充等を圖り、以て國防の萬全を期せねばならない。

固より我れには自ら恃む所あり、特に形而上に於ては、他國の追隨を許さぬものあるは勿論、變に應ずる方策に於ても遺憾なきを期して居るが、將來戰の趨勢に鑑みるときは、物質的威力も亦決して輕視を許さぬものがあることは謂ふまでもない。

日蘇兩軍の平時兵力を比較すると、第七表の如くである。

（第七表）

日蘇陸軍平時兵力比較表（昭和十一年初頭現在）

蘇軍	總兵力	約 一六〇萬	日蘇陸軍平時兵力	正規軍	
				民兵軍基幹部	約 七五萬
				民兵軍	
				交代部	約 六〇萬
				舊國家保安部軍隊（ゲペウ）	約 一六萬
				護送軍隊	約 九萬
				飛行機	四、〇〇〇機以上
				戰車	四、〇〇〇臺以上
				機械化兵團	大部隊 十數個
					小部隊 數十個
				裝甲自動車	一、〇〇〇臺以上

日本軍	總兵力	師團	飛行機	約
	約二五萬	七	戰車	一、〇〇〇機 二

むすび

八紘を掩ひて宇となし、億兆をして皆其の處を得しめ、混沌の世界に形體と秩序とを與へ、以て無窮に彌榮なる人類の福祉を齎し、世界恒久の平和を顯現せんとするは、實に我が肇國の大精神であつて、我が國防の本義も亦之れが具現に在るのである。

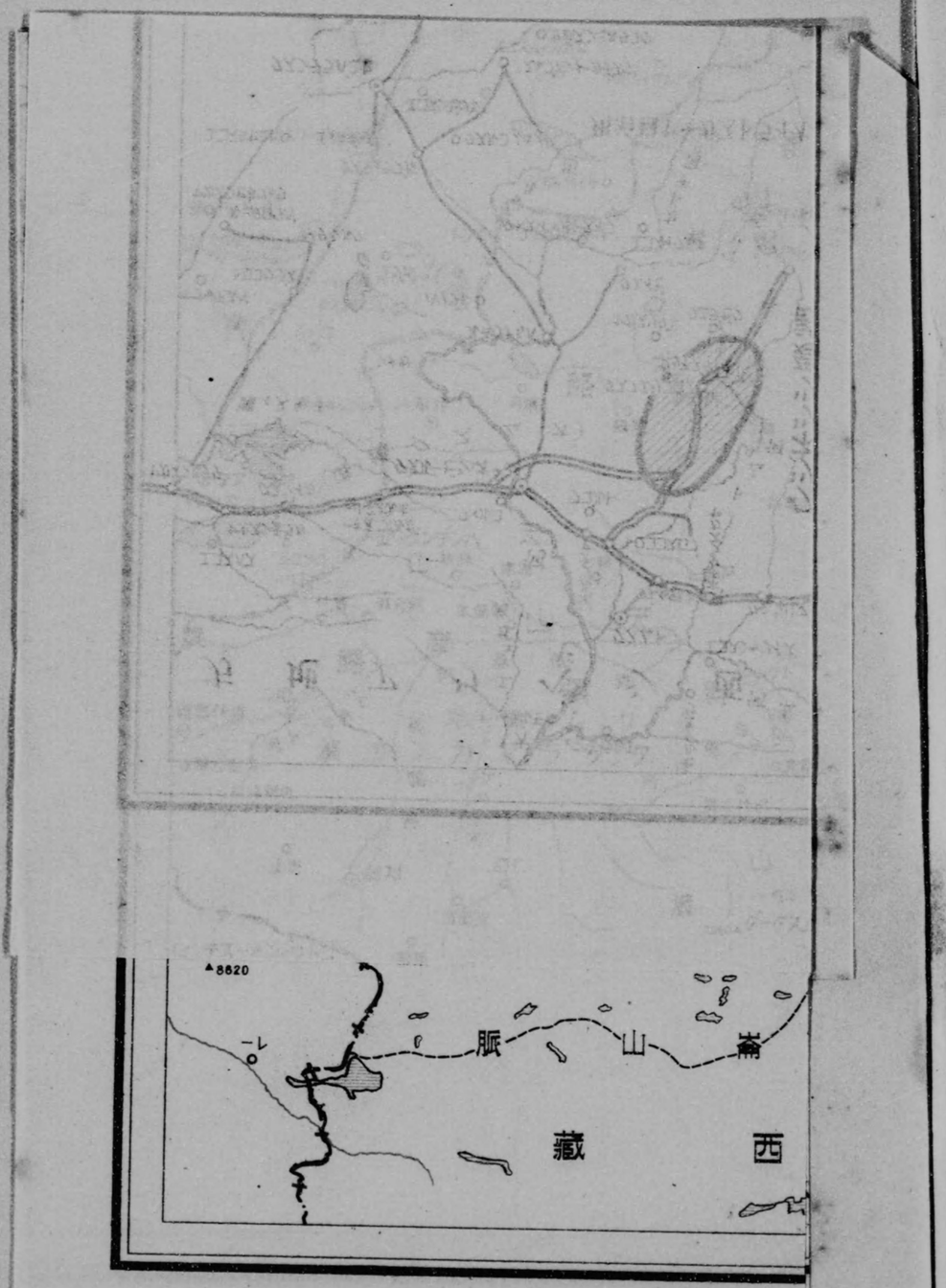
而して我が國民が此の肇國の大精神を體し、綜合國力を最高度に充實・發揚する時、國防は此に初めて全きを得るのであつて、軍備は此の綜合國防力の骨幹を爲し、有事の際其の發動に依つて國家の防衛に任ずると共に、更に平時に在つても、其の發動せぬ形に於て正義を維持すべき任務を有して居るのである。

熟〻現時に於ける世界の情勢を觀るに、過去の覇道的帝國主義政策の結果、全世界に亙つて廣大なる領土と資源と市場とを擁する強國は、自國に利益ある現狀維持を以つて世界平和の要諦なりとし、敢て全人類の福祉增進に思ひ至らず、此に正常なる發展を遂げんとし、又は至當なる生存權を要求せんとする國家・民族との對立を來し、又此等各國間に於ても、夫れ〴〵利害相錯綜し、爲めに各國家は何れも對立抗爭實に混沌たる國際關係を釀成してゐる。其の必然的歸結として、我が國に對しても列強の重壓は加重し來り、今日我が國の當面せる非常時局を現出してゐるのである。

斯くの如き情勢下に在つて、我が國は肇國の大精神を體し、東亞の安定勢

力として將又其の先達として、東亞諸國の正常なる發展を指導・援助すべき責務を持つて居るのであつて、皇道精神の發揚・正義の顯現の必要なること、未だ今日の如く急なるはないのである。之れが爲め我等國民は異常なる決意を以て、速かに名實共に皇道國家としての內容を完成して綜合國防力を強化し、就中其の骨幹たる軍備を我が國四圍の情勢に應ぜしめ、以て現下非常時局を克服し、崇高なる我が使命の達成に邁進するの覺悟を堅持しなければならぬ。

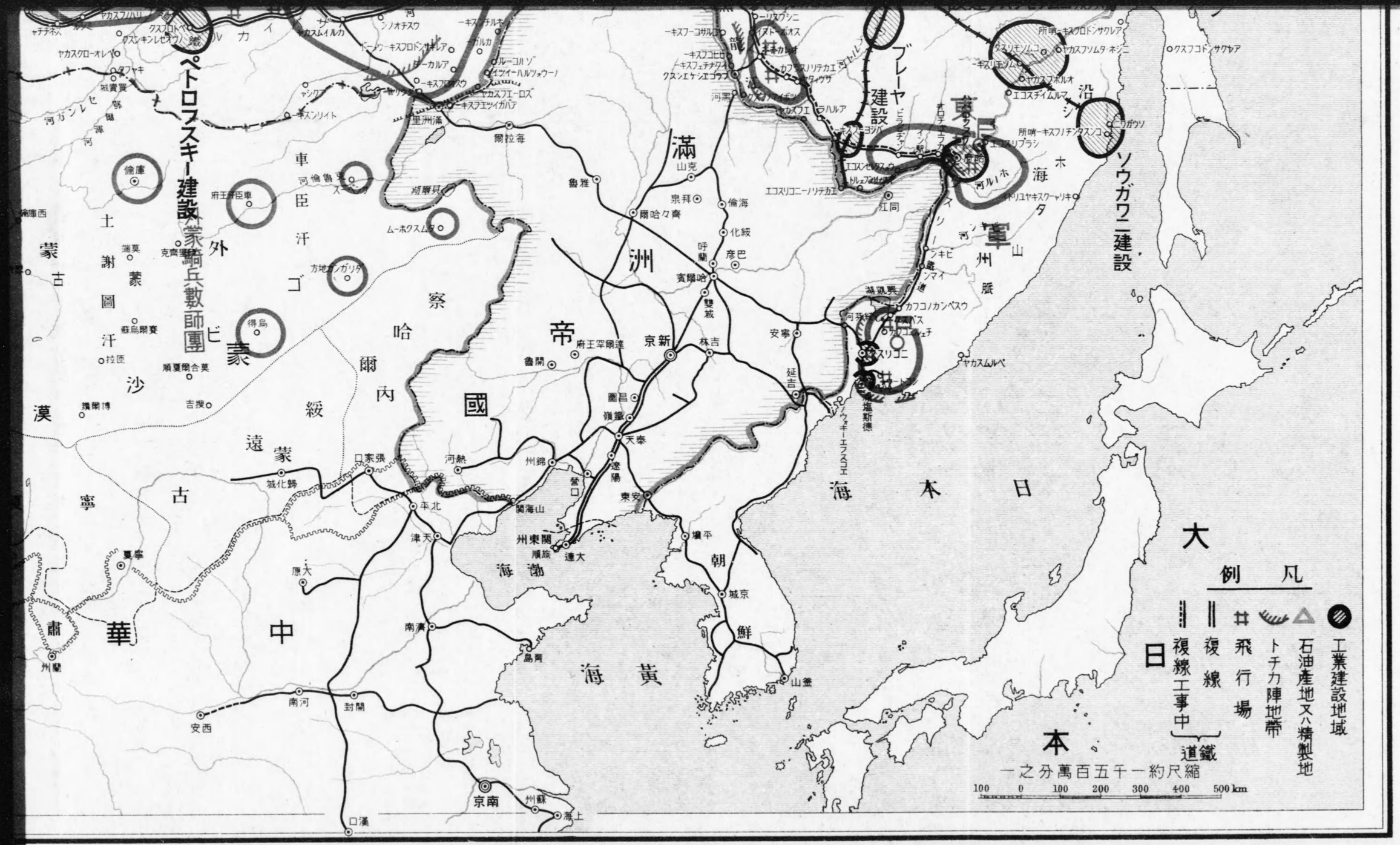
今茲に日露戰役第三十一回記念日を迎へるに當り、先輩の偉業を回顧すると共に、非常時局に處する我等國民の覺悟を述べた次第である。



極東赤軍配備概

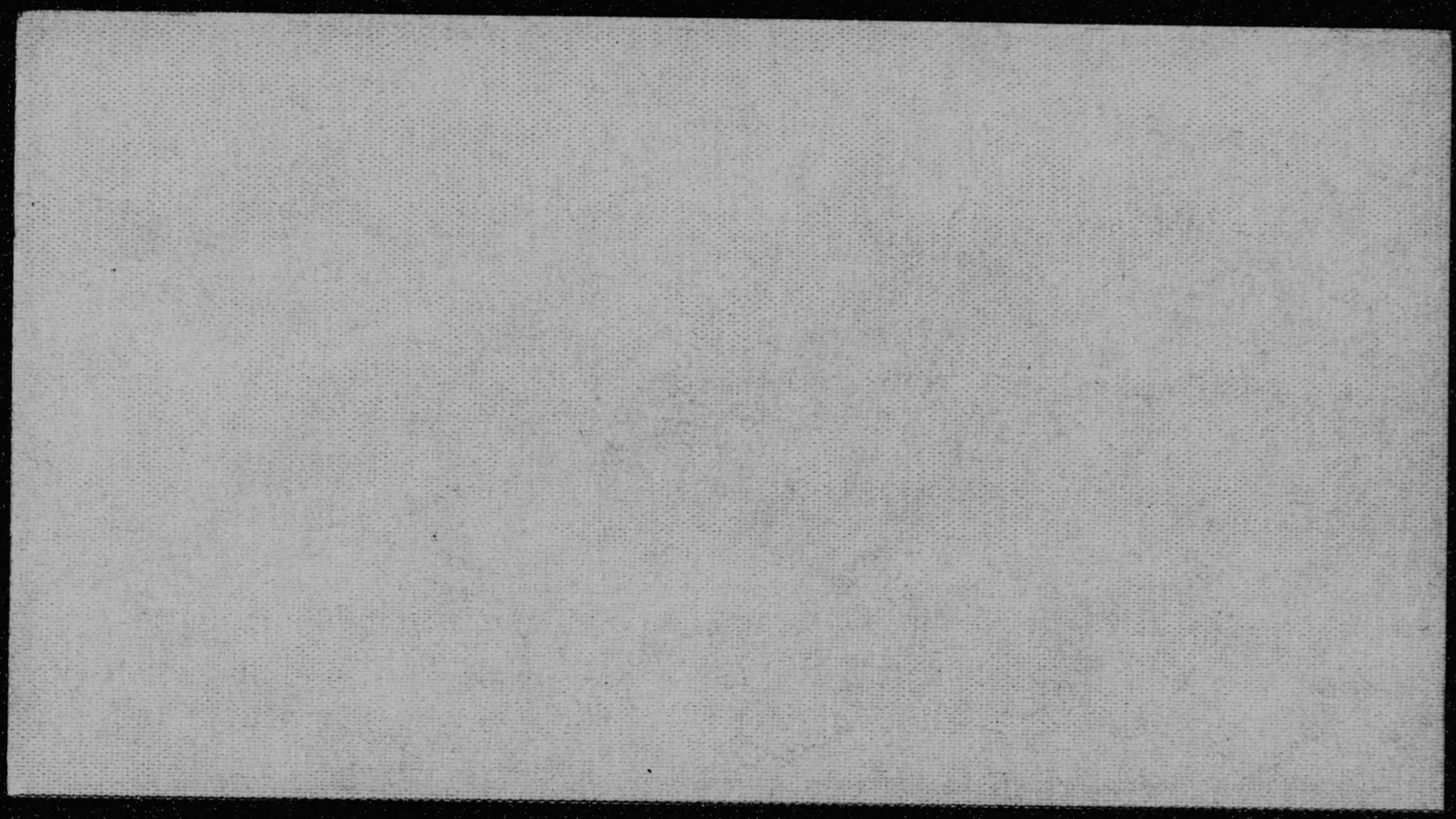
赤軍配備概見圖

西シベリア地方
蘇聯邦
東シベリア地方
ザバイカル軍管區
クヅネツツ建設
唐努烏梁海
オイラトスカーヤ自治州
バイカル



ペトロフスキー建設
蒙騎兵數師團
ブレーヤ建設
ソウガワニ建設
東支那海
日本海
黄海
大日本帝國
滿洲
朝鮮
蒙古
外蒙
中華
京新
京南
凡例
工業建設地域
石油產地又ハ精製地
トチカ陣地帶
飛行場
複線
複線工事中
道鐵
縮尺約一千五百萬分之一
100 0 100 200 300 400 500 km

赤軍總兵力二十數萬人
騎兵師團
步兵師團
飛行機
戰車
潛水艦
內蒙騎兵數師團
ペトロフスキー建設
約九〇〇〇
約一〇〇
八〇〇〇
二十三
十數箇
數十隻
數萬人
天山山脈
阿爾泰山系
北路
南路
新疆
ウイグル
ムスリム
タクラマカン沙漠
ジュンガル盆地
和闐河
ケリヤ河
トンカ河
ゲルト川
ハルバ湖
ウルンゴ湖
ルクチャ湖
ロプノール
青海
甘肅
寧夏
綏遠
察哈爾
熱河
チベット
西藏
蒙古
外蒙古
內蒙古
中華民國
帝國
ウルムチ
ハミ
トルファン
カシュガル
ヤルカンド
ホータン
アクス
クチャ
コルラ
ハラホジョ
トルファン盆地
ジュンガル盆地
タクラマカン沙漠
天山山脈
崑崙山脈
金山山脈
アルタイ山脈
ハンガイ山脈
ゴビ沙漠
ウランバートル
ウランバートル
ウランバートル

昭和十一年二月十日印刷
昭和十一年三月一日發行

陸軍省新聞班